

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 24

もうひとりのイタロの町、トリエステ

堤 康徳

イタロ・カルヴィーノが生まれた 1923 年、同じくイタロの名をもつ作家の長篇小説が世に出た。イタロ・ズヴェーヴォの『ゼーノの意識』(*La coscienza di Zenò*)である。20 世紀のイタリア文学を代表する作品といってよいだろう。精神科医に勧められて書いた患者の手記という形式をとるこの小説は、この患者、すなわち主人公のゼーノが綴る人生のエピソードによって構成されている。作者自身の言葉によれば、「この小説は彼の人生と治療の物語である」。「完璧な精神の幸福とは何か」を知るために、フロイトの著作を読んだことが、作者にこの小説を書かせる大きな契機となっている。

詩人エウジェーニオ・モンターレが、「われわれの日常生活を支配する灰色の偶然性の叙事詩」と評した『ゼーノの意識』はまた、すぐれた喜劇でもある。予想外の値動きをする株や商品の相場のように、偶然に左右されて浮き沈みを繰り返す人間の生の滑稽さが、淡々とした、しかも皮肉とユーモアのにじむ文体によって描かれているからだ。禁煙の誓いを立てながら、すぐにそれを破る口実を見つけてしまうゼーノに、多くの読者が笑いを誘われるだろう。

イタロ・ズヴェーヴォ (Italo Svevo) は、1861 年 12 月 19 日、オーストリア領の港町トリエステで生まれた。本名はエツレ・シュミッツ (Ettore Schmitz)。両親の一族はともにユダヤ系である。ズヴェーヴォは生涯、文筆を本業とすることのなかった作家である。1880 年から 20 年近く、ウィー

ンに本店のあるウニオンバンクのトリエステ支店で働いたのち、船舶の塗料を製造する義父の会社に入り、第一次大戦後まで本格的な執筆活動からは遠ざかった。



【トリエステの運河】

小説、短篇、戯曲、評論とズヴェーヴォの創作は多岐にわたるが、長篇小説は三作しか残していない。これらはいずれも自費出版された。長篇第一作『ある人生』(*Una vita*, 1992)も、第二作『老年』(*Senilità*, 1998)もともに 1000 部印刷されたが、とくに後者はほとんど反響を呼ばなかった。『ゼーノの意識』(1500 部)をかねてから交流のあったジェイムズ・ジョイスとモンターレが称賛しなければ、ズヴェーヴォの評価はさらに遅れていたかもしれない。『老年』が、2002 年に白水社から『トリエステの謝肉祭』(拙訳)という題名で刊行されたときも、原作の発行部数にならったわけではあるまいが、やはり初版部数は 1000 か 1500 という地味な数字だった。

ズヴェーヴォがジョイスと知り合ったのは 1907 年である。当時ジョイスはトリエステのベルリッツ・スクールで英語教師をしていた。ズヴェーヴォは、仕事に必要な英語を上達させる必要を感じていた。ズヴェーヴォがジョイスの授業を受けたことから、お互いの創作にも影響を与える実りの多いふたりの作家の交流が始まった。ジョイスの名作『ユリシーズ』の主人公レオポルド・ブルームは、ズヴェーヴォがモデルといわれている。

1928 年 9 月 13 日、イタリア内外での評価が高まりつつあるなか、ズヴェーヴォは交通事故が原因で不慮の死をとげた。



【クルーズ船 Costa Mediterranea】

ズヴェーヴォの長篇小説は、いずれも、彼の故郷の町トリエステを舞台にしている。トリエステは、海と、カルソと呼ばれる石灰岩質の高原に囲まれた町である。カルソは、第一次世界大戦で悲惨な塹壕戦のあった戦場としても知られている。

トリエステは、14 世紀にヴェネツィアの支配を脱してから、五百年に及ぶハプスブルク王朝の支配を受ける。カール六世の時代に自由港となったトリエステが、神聖ローマ帝国の海の玄関として発展するのは、マリア・テレジアの治世(1741-80 年)となってからであり、イタリア人、スロヴェニア人、ドイツ人、ギリシア人、セルビア人などの多民族が暮らす、多言語的な都市となった。マリア・テレジアの息子、ヨーゼフ二世の宗教寛容令によってユダヤ人はゲットーから解放され、もともとユダヤ人に比較的寛大だった帝国内での、さらなる社会進出の道が開かれた。

ナポレオンによって神聖ローマ帝国が解体されてから、ハプスブルク家は自らの王国をオーストリア帝国と称した。1861 年に成立したイタリア王

国は、1866 年にヴェネト地方を併合するが、トリエステ、ゴリーツィアなど旧ヴェネツィア領の多くが未回収地としてオーストリア領下に残ったため、これらの奪還を目指す運動(irredentismo)がトリエステでも活発化した。トリエステがイタリアの領土となるのは、第一次大戦後の 1918 年である。

前置きが長くなったが、今年の 8 月 22 日から 1 週間、トリエステに滞在し、ズヴェーヴォの足跡を訪ねてきたので、今回はその旅の報告をしたい。トリエステを訪れるのは 2 度目だ。最初は、ちょうど今から 30 年前の夏(1986 年)。旧ユーゴスラヴィアの首都ベオグラードから寝台列車でトリエステに入り、1 泊したのち、パラッツォ・グラッシで開かれていた未来派展を見るために、ヴェネツィアに移動した。短い滞在だったためトリエステの町のことはほとんど記憶に残っていないが、よくおぼえているのは、列車がトリエステに近づくにつれ目立つようになった、岩肌の露出したカルソの荒涼とした光景である。

今回は逆のルートでトリエステに向かった。ヴェネツィア・メストレから快速列車(Regionale Veloce)で 2 時間弱の旅だった。モンファルコーネを過ぎてから、列車は海沿いの断崖を下り始める。傾斜がきつくブレーキをかけながら走行しているのか、ときどきレールのきしむ音がする。

中心街のレジデンス型ホテルに宿をとった。ネットで予約したときに、できれば眺めのいい部屋がよいという要望を出してあったので、10 階にある海の見える部屋があてがわれた。港まで徒歩 2、3 分の距離だ。エクセシオールのように港の真正面に立つ立派な構えのホテルではないので、海を一望できるわけではない。だが窓からは、建物の屋根の連なりの奥に、グリーザの丘を背にした港湾の一部と、コバルト色に光る海の断片がたしかに見える。澄んだ空をときどき大きな雲が流れてゆく。宙を舞うカモメがしきりに鳴いている。その鳴き声は、人が大声で泣いているようにも、笑っているようにも聞こえる。

ある朝、起きて窓を開けると、視界をさえぎる巨大な船の舳先が見えた。港まで行くと、それは、海の駅(アウダー・チェ埠頭の隣の埠頭にある)に入港した地中海クルーズ船の Costa Mediterranea

だった。海の駅周辺はものものしい警備が敷かれていた。

トリエステは風の町だ。冬は、北あるいは北東からポーラと呼ばれる強風が、春から夏にかけては、アフリカから湿気を含むシロッコが吹く。滞在中は、連日の快晴だった。日差しは強く、日中の気温は30度を超えた。つねに影をさがしながら歩いていた。だが、狭い坂道を登っていると、海からの強い風に背中を押されることがたびたびあった。道に迷った私をわざわざ目的地まで車で送ってくれた親切な老紳士に、これもシロッコなのかと訊くと、これは湿気を含んでいないから、ボリーノ (borino: bora に縮小辞のついた言葉)だと答えた。風速はさほどではないが、夏にもポーラが吹くことを初めて知った。

トリエステに来てあらためて感じるのは、町と海の近さである。ヴェネツィアにいるとき以上に海を近く感じる。それはトリエステがアドリア海に大きく開かれた都市だからだろう。町の中心に位置する壮麗なイタリア統一広場(Piazza Unità d'Italia)から、海岸沿いの大通りを渡れば、すぐアウダーチェ埠頭(元サン・カルロ埠頭。現在の名は、1918年11月3日にイタリア海軍の船として初めて入港した駆逐艦アウダーチェに由来)に出る。ここには、釣り人もいれば、読書をする人もいる、ジョギングや犬の散歩に来る人もいる。埠頭の入り口にある事務所の壁には、ウンベルト・サーバの詩「棧橋」(*Il molo*)の一節が書かれた碑板がある。ここから、夏のあいだだけ、グラードに行くシャトル船が運航している(片道90分、7€。往復10.65€)。グラードは、トリエステ湾の西端と隣接するグラード潟(Laguna di Grado)に位置し、現在は海水浴客や湯治客でにぎわうリゾート地だが、その歴史はヴェネツィアよりも古い。もともと古代ローマの都市アクレイアの港・要塞だったグラードが大きく発展したのは、5世紀半ば、フン族の侵入から逃れるため、多くの人々が移住してからである。私もシャトル船に乗って日帰りでグラードに行き、床モザイクで有名なサンテウフェミア教会を見学してきた。じつは、グラードという地名を知ったのは、歴史への関心からではない。4度のワールドカップで活躍した名サッカー選手ロベルト・バジヨがこ

こに毎年湯治に訪れると聞いていたからである。

トリエステは魚介料理がおいしい。とくに、イワシがさまざまな調理法で食される。なかでも、sardoni in savor という前菜が美味だった。炒めたイワシを玉ねぎと酢で味付けしたシンプルな一品だが、夏はとくに白ワインとよく合う。

オーストリアの文化に影響を受けたトリエステには、由緒あるカフェが多い。トリエステのカフェは知識人の出会いの場でもあった。私が行ったカフェのなかでは、1914年創設のCaffè San Marcoの雰囲気ですばらしかった。ウィーン分離派の様式を基調とした店内は広く、奥は書店になっている。かつてはズヴェーヴォ、ジョイス、サーバが通い、現代では、ドイツ文学者で作家のクラウディオ・マグリリスが常客だという。



【Caffè San Marco】

8月24日未明、時差ボケのせいで浅い眠りから目覚めてベッドに体を横たえていると、震度1程度の長い揺れを感じた。それが地震だということはすぐにわかった。早朝のニュースで、マグニチュード6を超える地震が中部イタリアの山間地を襲い、甚大な被害が出ていることを知った。その後、何人かのトリエステ市民に揺れを感じたかどうか尋ねてみたところ、深夜だったせいもあり、地震に気づいた人は誰もいなかった。

肝心なイタロ・ズヴェーヴォのことを書きそびれてしまった。次回はトリエステの文学的な側面をとりあげたい。

(上智大学講師)

民話を訪ねる旅 5

剣持 弘子

●ベファーナの夜

イタリアの新学年は秋も深まるころにはじまるので、学校に通いはじめると年末はじきにやってきました。

ある日、民間伝承学担当のヴェントウレツリ先生は、1月5日の公現祭への出席者を募りました。公現祭というのは、東方の3博士がイエスの誕生を祝いにベツレヘムを訪れた記念の日です。

暮れのうちから、フィレンツェの商店街のウィンドウには箒に乗った魔女が飾り付けられます。子どもたちは魔女ベファーナがプレゼントを持ってきてくれるのを楽しみにしているということでした。

先生の実家のあるガルファニャーナ地方では、夜に行われるベファーナの古い行事を守りつづけていて、先生は毎年そこに学生を連れて行くということでした。

行事の説明の後、とつぜん、先生は私の方を見て、

「行きたいか？」

ときいてくれました。

私は

「行きたいです。でもどうやって行けばいいかわかりません」

と答えました。

すると、先生は一人の女子学生の方を見て、

「連れていってくれるか？」

とききました。

パオラというその女子学生は気持ちよく承知してくれました。パオラはときどきバイトの都合とかで講義を休むことがありましたが、そんなとき、私は彼女の求めに応じて録音したカセットテープを貸してあげていました。

1月5日の夕方、パオラと私は彼女のフィアンセ

が運転する車で、ガルファニャーナに向かいました。ガルファニャーナは、フィレンツェから西に車で約1時間の町ルツカから、セルキオ川に沿って北にひろがる山地です。夏には観光地にもなる風光明媚な地帯です。

夕暮れ時、こんな山の中を行くなんで、パオラが承知してくれなければとても無理なことでした。パオラに気前よくテープを貸してあげてよかったと思いました。パオラは外国からきた私に気軽にテープの借用を申し出ただけあって、何かにつけて積極的なところがあり、そういう性格を見込んで、先生も名指しされたのかもしれませんが。一見偶然に見えることにも何かしら必然はあったのでしょうか。



【公現祭のアコーディオン弾き】

いずれにせよ、私はこのあともたびたび良い出会いに恵まれることになります。そもそもヴェントウレツリ先生との出会いからして、そうでした。I 先生が私の旅の目的をきいてくださったとき、外交辞令だと思って遠慮していたら、なにごともしなかったでしょう。やはり、「叩けよ、さらば開かれ

ん」でしょうか。信仰のない者の勝手な解釈ですが、求め、努力することで開かれる道はあるのだと思います。

さて、私たちは教授の自宅でクッキーなどをいただきながら、暗くなるのを待ちました。男女合わせて十数人というところだったでしょう。

やがて先生に促されて、集落の中心部に向かうと、村の人々がすでに集まっていました。アコーディオンや縦笛を演奏する村人たちといっしょに私たちが歩き出すと、ベファーナ(女)とベファーノ(男)に扮した村の若者が長い糸巻き棒と籠をもって合流しました。私たちには歌詞カードが配られました。

一行が一戸ずつ戸を叩き、祝福の歌を歌うと、家人が出てきて、ベファーノの持つ籠に果物やお菓子を入れてくれます。そうやってすべての家を廻り、夜更けに最後の家に着くとすぐ、パーティがはじまりました。並べられたのは大部分が各戸でもらってきたお菓子や果物でした。ほかに飲み物やパンが用意されていました。



【家々を練り歩くベファーナとベファーノ】

めいめいがしばらくおしゃべりに興じたあと、突然一人のおじさんが立ち上がり、身振りよろしく何か話しはじめました。

「ほら、昔話がはじまったよ」

と、傍らの先生が教えてくれました。けれども、やはりその方言は、ほんの少ししか聞き取ることができませんでした。聞き取れたいくつかの単語から、それが「雄牛になった市長」という笑い話であることだけは推察できました。イタリアに来るまでに、イタリアの昔話の資料は沢山読んでいて、かなりの話は頭に入っていたのです。昔話だけでなく、大学の講義も、よく知っている内容のことなら、かなりの程度、聞き取れることは経験済みでした。でも、すべてを理解することが難しいこともよくわかっていました。

帰りの車の中でパオラに、「どうだった？」ときかれ、私が「行事は面白かったけど、あの話はよく聞き取れなくて残念だった」

と答えると、

「そんなこと、気にしないで大丈夫、私にだってよくわからなかったもの。すごく訛ってたよね」と、慰めてくれました。でも、彼女の理解の程度は同じではなかったはず。こういう雰囲気の中で昔話が話される習慣があるのだということがわかってただけで、満足しなければなりません。

そのころから、イタリアで出版される民話資料集は、イタリア語と方言の対訳が一般的となっていました。これは外国人向けというより、イタリア人にも、他の地方の方言を理解することが難しいことがわかってきたからだろうと思います。イタリアは長い間小国に分かれていたので、地方差はとくに大きいのかも知れません。

そのあと、パオラたちはこじんまりした山の中のホテルに連れていってくれました。ホテルの予約は、パオラに勧められて、フィレンツェからすでに済ませてありました。

翌朝、パオラたちは観光旅行に行くということで、私が寝坊している間に出発していました。起きて見ると、ホテルは緑一色の山の中にありました。私はホテルの隣のバールで、菓子パンとカプチーノというイタリア式朝食を済ませ、近くの鉄道の駅から一人でフィレンツェに戻りました。

今月のお話はヴェントウレツリ教授の資料集から選びました。宗教伝説です。イタリアには宗教伝説が多いのですが、昔話でも、聖母マリアやその土地の守護聖人が主人公の援助者として語られることが少なくありません。



【昔話に興じる村の人たち】

【今月のお話コーナー：宗教伝説】

～クリスマスツリーの伝説～

ガルファニャーナでは、クリスマスツリーはビャクシン(柏槇)の木で作る。聖母マリアが夫ヨゼフとヘロデ王の怒りから逃がれて山の中をさまよっていたとき、その聖家族を助けた木がビャクシンだったからだ。

聖母マリアはイエスを抱いて、降りはじめた雪の中を、身を隠してもらえる場所を探してさまよっていた。あたりには、家一軒、小屋一つもなかった。森や茂みがあるだけだった。

森の中で、聖母マリアは、エニシダを見つけて頼んだ。

「ちょっと避難させてくれないかしら？」

「いいえ、だめよ。ほかの木のところへ行ってちょうだい」

とエニシダは断った。そして、そのときまで垂れ下がっていた枝を、真直ぐ上に向けてしまった。

次に、聖家族はヒースの木のところに行って頼んだ。でも、ヒースもヘロデ王の兵士に火をつけられることを恐れて断った。そして、枝をピンと上に向けてしまった。

そこで、聖家族はビャクシンのところへ行って、

頼んだ。

「お願い、ヘロデ王の兵士に追われているの。あなたの枝にかくして」

「いらっしゃい。さあ、私がなんとかしましょう」

ビャクシンはそのときまで上に向けていた枝を下に曲げ、うまく隠れることができるように細かい葉っぱを茂らせてくれた。

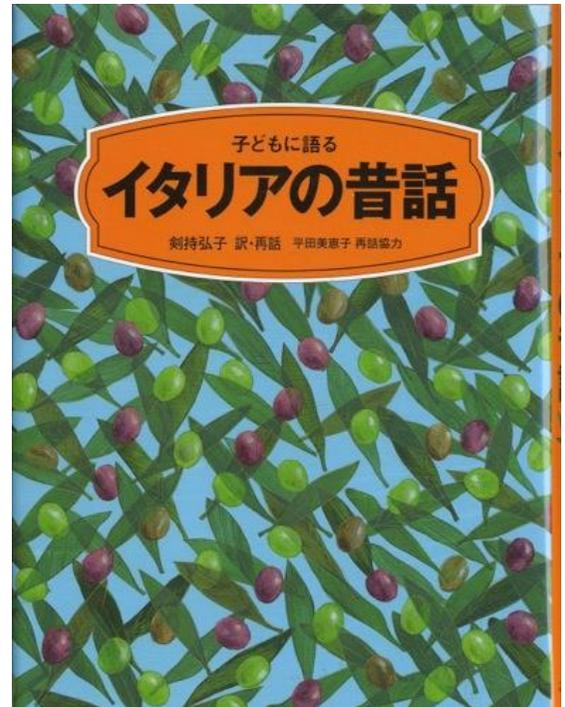
ヘロデ王の兵士は森じゅうを探したが聖家族はみつからなかったので、引き返していった。

朝が来て雪がやんだとき、聖家族は無事にエジプトに向かうことができた。

そういうことがあって、ガルファニャーナでは今でもクリスマスツリーにビャクシンの木を使うのだ。

次回は、民話を訪ねる旅6 の予定です。

(イタリア民話研究家)



【「子どもに語るイタリアの昔話」 剣持弘子著】

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/